西脇知事と子育てに関する懇談会

日時：平成30年６月16日（土）11:00～12:30

場所：八幡市立子ども・子育て支援センター「すくすくの杜」

○司会　本日はようこそお越しいただきました。

本日司会をさせていただきます佐藤と申します。よろしくお願いいたします。

ただいまから西脇知事と子育てに関する懇談会を開催いたします。本日は子育てをテーマに皆様の取り組みや御意見をいただき、子育ての魅力や現状について、西脇知事と御自由に意見交換いただければと思います。それでは本日の参加者の皆様を御紹介させていただきます。

育児中のお母さん北崎瑞帆さん。育児中のお父さん早田良平さん。

「すくすくの杜」保育士近藤真由美さん。精華町立保育所伊藤治子さん。

ＮＰＯグローアップ代表秋田裕子さん。

そして京都府知事西脇隆俊でございます。

○西脇知事　西脇です。よろしくお願いします。

○司会　それでは早速ですが、ここからは松村淳子健康福祉部長に進行をお任せしたいと思います。部長よろしくお願いいたします。

○松村部長　おはようございます。よろしくお願いします。

○一同　お願いします。

○松村部長　皆さん大きな声で、ちょっと上が空間になっておりまして、もごもごとしゃべるとせっかくの意見が知事まで届きませんので。何やったらもっと近づけてもいいぐらいなので、大きな声でよろしくお願いします。

そうしましたら、最初西脇知事のほうから御挨拶とそれから知事御自身の自己紹介、子育てに関して、よろしくお願いします。

○西脇知事　はい。本日はお忙しいところをお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。また、この会場八幡市立子ども・子育て支援センター「すくすくの杜」を使わせていただくことについても本当に厚く御礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございます。

私も常々言ってるんですけど、少子高齢化ということもありますし、それから核家族化とか、地域社会とのつながりが薄いというので、子どもの声ですね、町中で響くようなことがだんだん少なくなってるのと違うかなというのがございます。私の思いとしては、ここまでにぎやかじゃなくても、町の中に明るい子どもの声が響き渡るようなまちづくりができればと。それで、選挙公約でも言ってたんですけれども、子育て環境日本一を目指すというので、18日月曜日（大阪北部地震のため２１日に延期）に私を本部長とした推進本

部を立ち上げるんですけれども、出会いから結婚、出産、子育て、教育、場合によっては、そのお子様の就労まで総合的に御支援できればなというふうに思っております。

今日は府議会の先生も多数お見えでございますが、６月の補正予算で子育てのための予算ということで、例えば医療体制とか出産、子育て環境、また、場合によっては働く環境まで含めての予算を提案するつもりでございますけど、予算をつくってもそれを効果的に皆さんに本当に喜ばれる形で執行するためには、ぜひとも現場で子育てに携わっている方の御意見を聞きたいと思って、今日はお集まりいただきました。子育て中のお母さん、お父さん、それから保育士と支援されているＮＰＯと。短い時間なんですけれども、ぜひとも忌憚のない御意見を賜りたいと思います。

中川先生、田中先生、森下先生、それから堀口市長、それから森川議長と菱田副議長にも御同席をしていただいておりますけれども、そういうことを余り気にせずに、忌憚のない御意見を賜りたいというふうに、よろしくお願いします。

自分の体験なんで座ってしゃべります。

私はですね、結婚が早かったんですね。満26歳で結婚して、27歳のときに子どもができるんですね。しかも建設省で働いていましたし、そのときは主計局に出向してましたので、正直言うとほとんど仕事を24時間やっていたのもあって、余り貢献はできてないんですけど、２人いる子どもは、たしか早田さんもそうだったかもしれませんけど、１年９カ月しか離れてなかったんですね、上の女の子と下の男の子が。だから下の男の子をお風呂に入れるのだけは妻から言われて、それだけは必ずやってと。確かに一人一人を見てやるのは大変やった。これだけは私の仕事としてやったんですけど、何せ帰るのが遅いので深夜になることも多かったんですね。だから物すごい宵っ張り子になってしまったことと、余り深夜に風呂に入れるとほとんど夜泣きはせえへんかったんです。ただ一方で、下の男の子が全然言葉がしゃべれへんので医者に連れていったところ、親御さんが上の女の子に構い過ぎだと言われまして。というのは、余り嫉妬せんようにということばかり考えてたので、上の子をずっと大事にしよったら、下の子のほうに余り意識が行かへんようになったらしくて。その後、ちょっと大きくなったらようしゃべるしゃべる。全然心配してなかったんですけれども、そういうことを言われました。私自身はそういう体験なんですが。

もう一つ、長なったらあかんのですけど、私自身が子どものとき本当に体の弱い子で、成人できるかなというように、幼稚園の１年目は半分ぐらいしか行かなかった。いつの間にか余り病気せえへんようなったんですけれども、そのときの私というか、私を育てた親がものすごく大変やったという話をじいちゃんばあちゃんから聞かされましてですね。いろんなお子さんの特徴があるんですけど、それぞれ悩みがきめ細かいのがあると思っていますので、今日は短い時間なんですけど、ぜひともいろんなことを聞けたらと思います。どうもありがとうございます。

○松村部長　ありがとうございました。

そしたら皆さんのほうからも。先ほど司会のほうから皆様のお名前、所属は御紹介いただいたところですけれども、改めて自己紹介と、子育てに関して、あるいは支援者に対して今の思いとか、いろんなお話をいただけたらと思います。じゃあ北崎さんから。

○北崎瑞帆　はい。本日はよろしくお願いします。お会いできてうれしいです。

私は北崎瑞帆と申します。きょうは南丹市の園部町から来ました。私自身南丹市で生まれ育っています。今日、主人も来てるんですが、主人も南丹市園部町の方で、結婚後もずっと園部に住んでいて、生まれてから一度も園部以外のところに住んだことはございません。子どもは３人おりまして、上の子が小学校４年生、真ん中の子が１年生と一番下の子が今１歳２カ月になりました。私自身結婚してから５年は自分の、私のほうの実家に家族全員で住んでいて、結婚５年後に実家から近く、車で10分ほどの距離のところに今は引っ越して、家族５人で住んでいます。子どもは３人、男の子３兄弟を育てています。すごくわんぱくで、今日も行きしに車ですごくけんかをしてわあわあ言いながら来ましたが、、私もすごく早く結婚をしていて、上の子は21ぐらいの年で出産をしています。すごく周りのみんなが楽しそうにされている中、いろいろ自分の子育てを悩んだこともありましたが、今は子供３人と出会えたことがすごくうれしく思いながら毎日楽しく過ごしています。本日はどうぞよろしくお願いします。

○松村部長　では、そのまま秋田さんに。

○秋田裕子　ＮＰＯ法人グローアップの代表をやっております秋田と申します。私はもともと新潟県の出身なんですね。新潟の本当に田舎で住んでいたんですけども、そこから高校卒業を機に関東の短大のほうに行きました。新潟は「田舎なので帰らない」と言って、そのまま関東のほうに就職をしました。そこで主人と出会いそのまま結婚するんですが、うちは一姫二太郎、３人子供がおります。ずっと働いておりまして、もう８年不動産会社で本当に楽しく仕事をしてたんですが、もうさんざん徹夜もしたし、もういっぱい働いたから、もうこれからは子育てに専念して第二の人生というか、全く違う生活を楽しむんだと思って。ちょうどそのころ産休とかも出始めたころだったんですが、私はやめると。「さんざん働いたのでこれからは楽しむから、子供たちと」と言ってやめたんですが、実はマンションの密室の育児に非常に悩みまして。本当に自分が何のために。あんなに思い描いていたような子育てと現実、もう寝たので置こうと思ったら背中にスイッチが入ってまして、泣いて泣いて。もうずっと一人目はだっこして育てた記憶があります。それが２人目３人目と増えていくごとにだんだんと軽くなって、本当に子育ては楽しいなというふうに思いかけたときに、主人が京都、南丹の出身なんですが、関西に戻りたいということで、Ｕターンでこちらのほうに戻って参りました。

彼にとってはＵターンなんですけど、私にとっては未知の世界で。新潟と同じような環

境だったんですが、田舎のほうが子育てしやすいよなと思って入ってきましたが、いろいろありましてＮＰＯを立ち上げていくことになるんですが、それはまたこの後でお話したいと思います。ありがとうございます。

○松村部長　ありがとうございます。じゃあ伊藤さんよろしくお願いします。

○伊藤治子　失礼します。こまだ保育所の保育士をしております伊藤と申します。精華町の保育所です。

私は今は精華町の保育士をさせていただいてるんですけれども、うちの両親も働いておりまして保育所で育った子なんです。精華町で生まれて、母が働いているときには保育所はなかったんですね。ですので、そのときはちょっと遠く離れた親元の舞鶴のほうに私が産前産後の２カ月で母と離れて。母は中学の教師をしておりましたので、離れたところでの生活があったんです。やっと私が３歳半になったときに保育所ができましたので、精華町でお世話になって。本当に保育所にはお世話になったといって、母から感謝感謝やったと。園長先生とかにも本当によくしていただいたと言って、保育所が家族をつないでくれはったというふうなことをずっと聞いてたんです。保育所に縁がありまして、精華町の保育所で恩返しをさせていただこうかなと思いまして、就職させていただいて二十何年も過ぎてるところなんですけれども。

私も個人的に、子供は男の子が２人おりまして、もう今成人しております。でも保育所でお世話になって、私も母と同じ道で仕事をしながらの子育てをしながら今に至るんですけれども。保育所にはすごくお世話になってるという気持ちがいっぱいで。

私が子供を育てたときには、今自分が保育士をしてすごく感じるんですけども、わからないこともいっぱいあったんです。わからないことだったら親に聞くこともあるんですけども、雑誌を見たり本を見たりして、先輩の方に聞いたりとかして、子育てのノウハウを聞きながらしてきたんですね。でも今はインターネットがすごくあふれておりまして、もうぱぱっとスマホで検索してということで情報があふれておりまして。そこら辺で今と昔の子育ての違いというか、私たちは情報が余りないものやから足を運んで「これや」と思って、「これをやってみよう」と思って失敗したら「ほんならどうしたらいいんやろう」と考えてたんですが、今は検索をしてすごく情報があふれる中で、またあふれ過ぎて混乱してはる方が多いなと思います。保育所の保護者、そして子育て支援センターも併設しておりますので、在宅のお母さんたちの様子も見ていると、すごく混乱してるなというのは思います。今と昔のちょっと違いがあったり。赤ちゃんをおっぱいをあげるときに、私らは携帯とかはなかったですから、子供の顔を見て「おいしいか」「そうか」とか言って、「おなか減ってたね」とか語りかけながら忙しい中してたんですけども、今はすぐラインとかが気になります、携帯、スマホがね。片手にスマホ、片手に赤ちゃんでおっぱいちょっと持ってやってる姿を見かけて、みんながみんなじゃないですよ、見ながらこうされて

る方もいらっしゃる。赤ちゃんのあやしかたなんかを見てはる人もいはるし、しっかりと表情を見て語りかけてらっしゃる方もいらっしゃる。でも横にはちゃんとスマホも置いてあるというので、いろいろ時代が変わったら子育てのスタイルも変わってくるんだなというふうに、保育士としても今感じておる次第です。

今日はこのような機会を与えていただきまして本当にうれしく思っております。楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

○松村部長　じゃあ近藤さんお願いします。

○近藤真由美　よろしくお願いします。八幡市の子ども・子育て支援センター「すくすくの杜」の所長補佐をしております近藤です。よろしくお願いいたします。

私はこちらの八幡市の職員に、短大を卒業しましてなりまして、保育園の勤務となりました。いろんな保育園に、転勤なり結構させていただいて、それからこちらの支援センターの職員になったんですけれども。すくすくの前には、八幡市には３つの支援センターがあるんですけれども、あいあいポケットというところでも２年勤務して、それからこちらで今３年目になります。支援センターの職員としては、合わせると５年目になるんですけれども。保育園の勤務と支援センターの勤務ということです。

まず自分の子育てと言いますか、子供は１人が大学生で１人はもう社会人なんですけれども、自分が働きながら子育てをしてきました。自分が保育園に勤務しているときの担当のクラスのお子さんが、我が子と同じ年齢だったりということもあったりして、何というのか、同じような感じで育てていけてるというのが、とても楽しくて。今は、おばあちゃんではないですけれども、お母さんへのアドバイスというか、一緒に悩みも解決するような感じで接していますけれども。

自分の子育てのときと今のお母さんというのは、違いといいますか、やっぱり今のお母さんは、先ほど伊藤さんも言われていましたけれども、私らよりもよく情報を知っておられて、自分でも調べられます。ちょっとの心配事もこちらに打ち明けてくださいって、本当にかわいらしいと言ったら失礼ですけれども、自分の息子娘みたいな感じの年齢の方もいらっしゃいますし、一緒に悩みも解決できたらいいねということで今は接しています。よろしくお願いいたします。

○松村部長　ありがとうございました。お待たせしました。早田さんよろしくお願いします。

○早田良平　早田良平と申します。八幡市に住んでおります。妻も私も九州の出身で、２人とも関西の企業に就職をして働いてたんですけども、登山サークル、山登りが２人とも好きなので登山サークルで知り合って結婚をしました。子供は１歳９カ月の娘と５月に生まれた息子が２人おります。１人目のときは、妻を実家に帰して私はこちらに残ってずっと働き続けて過ごしたんですけれども、２人目になると、ちょっと両親の負担も大きいかなということで、両親に二、三週間来てもらって少し手伝ってもらって、その後私が２週間

ほど育児休暇を取って、何とか妻の育児の特に大変なときにフォローができたらいいかなと思って取りました。

今は37歳なんですけども、結構、20代の若手とかは育休をだんだん取り始めてるんですけど、この年齢になってから取る人は余りいないからどうしようかなというふうに迷ったんですけども、妻もちょっと大変かなと思って取得して今育児をしております。１人目のときは、実家に返していたのでなかなか成長をする姿とかが見られなかったんですけれども、やっぱり２人目になると、男の子なんですけれども日々顔が変わってきたりして、そういった成長をする姿を見るのがすごく楽しみになっています。今回ここに参加させてもらったのは、妻がなかなか地元に、ここにゆかりがないので支援センターとかを利用させてもらって、そういった縁でこちらにも今回出席させてもらったので、意見交換ができればなと思います。よろしくお願いします。

○松村部長　ありがとうございました。意見交換なので、ここからは知事が。

○西脇知事　結構時間も押してきたので。自己紹介の中で聞いた部分もあるんですけれども、順番には現時点での悩みとか相談したいこととか、当事者としてこんな問題があるというようなことを聞きたいんです。

まず、北崎さんのほうからなんですけど、３人の男のお子さんということで大変やなと思うんです。それで、今までの途中過程ですね、一番大変やったこととか、逆にこういう喜びがあるとか、若干先ほどの話を具体的にお願いできれば。

○北崎瑞帆　大変だったことは、私は自分の実家に５年ほど住んでいたので、長男と次男を出産したときは産後すぐに自宅に帰って、みんながいる環境で育てていました。私のお母さんお父さんとそして私の祖母とみんなで一緒に、主人も一緒だったので、一人ではないという感じで安心して出産をしたんですけど、いざ出産してみると、どんだけ周りに助けてもらって手を差し伸べてくれる人がいる環境でも、何かすごく一人でさみしくなることがすごく多くなりまして、すごく不安になりました。３人目は、上の子が小学校ということもあったので、自宅には帰らず、今の家で主人と主人の家族の協力と私の家族の協力で過ごしたんですが、そのときはもう３人目というちょっと余裕があったので、余り孤独感もなくスムーズに育児ができたなと思いますが、やっぱり１人目のときは産んでから、全てに対して不安です。やっぱり産後１カ月の間などは何かよくわからないけど悲しくなって、すごく泣いたりもしていました。でも日々子供を育てて、私がこんなので大丈夫かなとか、このままで大丈夫かな、と常に日々大きな不安はありますが、やっぱり育てていくための金銭面の不安とか将来子供たちは元気に大きくなってくれるかなとか、そんな感じで大きな不安もありながら育てています。

○西脇知事　どうもありがとうございました。次、順番に秋田さん。自分の子育てのことでもいいですし、今いろんな支援をされていると思うんですけれども、一番のよう聞かれる

不安というか相談事は、どういう部分が多いのかと、どういうところを支援してほしいと言われるのかと。その辺、もし何か傾向でもあればですね、教えていただきたい。

○秋田裕子　南丹市は京都市の次に広いんですね。旧４町が合併して南丹市になってるんです。私たちは今、ＮＰＯとして子育ての広場のほうを運営しているんですが、各町に１カ所ずつ広場を運営させてもらっています。南丹市は、端っこの八木から美山まで車で１時間ぐらいかかってしまうんですね。そうすると、生活の環境とか習慣とかも本当に違うんです。なので、私たちは４町やらせてもらってますけれども、４町に行った先で悩みってやっぱり違うんです。

例えば、園部のほうだと比較的新しい方とか若い方がどんどん入ってきているので、本当に今の都市型の悩みが多い。でも美山のほうに行くと、友達の家に行くのに車で15分以上かかる、冬場は家から出られない、そういった問題。あとは同居をしているけれども嫁姑問題が話題になったりとか、これから家を建てたいけれども、その資金繰りはどうするのかとか、本当にレパートリーが広いんですね。ただ、共通しては、やはり子供に対する接し方とか、あとは兄弟間、南丹市は本当に子供が多いんです。北崎さんも３人ですけども、私も３人。うちのスタッフは15人いますけど、一番多いのは５人います。１人っ子って余り聞かないです。そうすると、どうしても兄弟を比べてしまって、どう育てていいのかわからないとか。あとは本当に初めての子育てで聞く人がいないので、広場に来ていろんな悩みを相談する。ただ、相談できる場に来られる方はいいんですけれども、出てこない方のほうが本当は深刻なんだけれども、そこに私たち支援者としては、どうアプローチしていくのかというのが本当に大きな課題だと思っています。

○西脇知事　ありがとうございます。

次は伊藤さん。伊藤さん、先ほど相当いろいろお話しいただいたんですけど、世代間というんですか、スマホの話が出ましたけど、僕らもそうなんですけど、全然違うわけですよね。さっきここで聞いたんですけど、ここがママ友ができる場所だと聞いて。公園デビューというのは最近一切ありません。公園に行っても誰も子供がいいひんって言われたんですけど。ネット環境も含めて、その辺の変化というか、どういうふうに変わってきているかということと、今の現状、これからますます変わってくるかもしれませんので、その辺のことを悩みの変化とかも含めて教えてください。

○伊藤治子　本当に情報が多様化している中で、お母さんたちが何を信じたらいいのかがわからないという問題がありますよね。この間もあったんですけれども、熱が出たんですと。熱が出たんですけど、お医者さんへ行っても理由がわからないと言わはります。でも下がらないんですって。子供も機嫌も悪いしということで、どうしたらいいんでしょうというふうに相談があったんですね。子供ちゃんの熱の話なんですけども、いろんな自分の悩みや旦那さんとの関係の話やらをお母さんと話をちょっとその場でさせてもらいました。そ

の人は実家のお母さんとの関係が悪かったもんで、もうストレスでいっぱいやと、寝る間もないとかいうことで。結局、話を聞いて「いや、ちょっと何か先生すっきりしました」と。それが昼だったんですね。そしたら夕方になってまた電話がかかってきたんですよ。先生すみません、熱下がりましたって。お母さんが常にいらいらしてはったり、どうしたいいのかわからへんというのが、子供に伝わってたという部分があったりもするねんなというのが、最近割とあるんです。保育所に連れてきてはるお母さんたちなんですけど、毎日生活大変です、仕事がね。お母さんはみんな働いてはる中で、ゼロ歳児さんなんかやったらほとんど起きてる時間に、接することが余りないという方がいらっしゃって、どうしたらいいのかがわからへんという人で。だから親がおろおろしてはる部分が子供に伝わってしまっているのがあるなというのはすごく感じました。

○西脇知事　熱の話ようわかりました。僕らがよう言うたのは、子供を寝かすとき、テレビ番組が始まるとかね、出かけるときは絶対に寝ないんですよ。こっちも一緒に寝てしまえというときは寝てますが、絶対伝わりますよね。どうもありがとうございます。

　それで、これは親の方の精神的安定を保つというのは、実際は、皆さんの仕事の範囲を超えてるように思うんですけど、それでもやらなあかん。

○伊藤治子　今はそっちの方が大きいです。お子さんをお預かりさせていただいて、お子さんの成長を一緒に支援させていただくという部分はもちろんなんですけど、それを取り囲む環境で、親の、お母さんたち、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃんたちに声をかけて、今日はこんなんやったでとか、お母さん今日は元気か、とかいうような声かけをするということで、お母さんが安心して「先生、今日も頑張って行ってきます」とか言うて行かはったり。親の支援というのが、すごく割合的には増えてきてるような気がします。だから保育士は子供だけ見てたらいいのではなく、そういう不安、周りを取り囲む環境もひっくるめての支援を、親支援をしていかないとあかんということは、私たちもすごく感じていて、みんなで子育てしてるという感じを。

○西脇知事　ありがとうございます。次は近藤さんですね。今日はたまたまお母さんお父さん代表が来ておられるんですけど、日ごろ特に、すくすくの杜に来られている、親御さんから聞かれてる悩みですね、こんなんがあるとか、どんなんがある、その辺ちょっとバラエティに富んだのを教えてもらえたらなって。

○近藤真由美　日ごろ、すくすくではいろんなプログラムがあるんですけれども、「すくすく赤ちゃんと」といって、お母さんと赤ちゃんと交流してもらう場があったり、心理士だったり保健師だったり栄養士だったりと専門職がおりますので、専門職もその場に入ってもらって、子育てについてのそれぞれの立場からちょっとしたアドバイスをしたりですとか。保育士からは触れ合い遊びというか、お子さんとこういうふうに関わったら楽しいですよ、というのをお知らせする場があるんですけれども、そこでは交流ももちろんされま

すけれども、やっぱり一番というか多いのが健康面のことですとか、お子さんの発達面のことが割と多かったり。まあ栄養面から離乳食のこともたくさん聞かれたりしていますね。先ほども携帯でもいろんな情報を見ておられて、どの情報が正しいのかお母さん自身も迷われてて、専門職がおりますので、すぐにそこで解決してもらって「ああ、わかりました、ありがとうございました」という親御さん、おられますね。お母さん同士で、２人目３人目のお母さんがいはったら、そこでアドバイスをもらったりとかしています。

○西脇知事　親御さん同士の情報交換も多いということ。

○近藤真由美　そうですね、多いですね。されてますね、はい。ここで仲よくなられて。

○西脇知事　それも重要なんでしょうね、やっぱり。孤独感がなくなるという意味では。友達ができる場が。

○近藤真由美　そうですね、そういう場がたくさんあればいいなと思います。

○西脇知事　早田さん、最近の若い人が育休を取る傾向にあるという話と、どうですかね、実際問題、取られるときに職場の反応とか、その辺については。どんな感じでやったか、もうちょっと詳しく教えてもらえますか。

○早田良平　最初は直属の上司に相談したときは、子供ができておめでとうということですごく喜んでもらえましたし、特段この時期はやめてくれとか、そういうことも言われませんでしたし、周りの方からも「育休取ったの、すごいね」とか、そういった声もかけてもらったので、大分。私が入社した10年以上前は、男性が育休を取るというのはまず考えられなかったんですけど、だんだん職場でも取ることは珍しくはなくなってきたなというのが現状で。女性の方も結構、以前はもう子供ができたらやめられる方が多かったのが、今はもう産休に入られて、育休に入られて続けられる方が大分、増えてきたので、そういう意味では、そういった制度を使いやすくなってきた環境にあるかなと考えています。

○西脇知事　育休を全部取られたら最大何年。

○早田良平　一応うちの会社では、子供が３歳になるまでの期間は取れるような制度になっておりますけれども、私はちょっと今回は短期間で２週間ですけども、ちょっと取ってみました。

○西脇知事　３年間取ることによって、会社におけるキャリア形成とか、仕事がそれだけ空白ができる、それの不安というのはないんですか。

○早田良平　もちろんありますね。今回はちょっと短期間ですけれども、大体５月中にあらかた仕事を片づけて、休んでる期間は、特段何も問題が発生しないように心がけて準備をしたんですけども、もし今後、また子供が生まれて取るときになると、６カ月１年というのはちょっとまだなかなか、上司にも。それだけ長期間だと上司にも言いにくいなというのが本音です。

○西脇知事　ありがとうございます。秋田さん、どうぞ。

○秋田裕子　すみません、早田さんは育休をとられたということで。うちの南丹で産後のサポート事業ということで、核家族なので、相談する人もいないし、赤ちゃんの首が据わるまで週にいっぺんサポートに入ってほしいということで、育児のサポート、家事のサポートに入らせてもらってるんですね。そのお母さんが、たまたま昨日なんですが、訪問しに行ったときに、御主人が育休を取ることになりました、というふうに言っていただいて。最初首が据わるまでということで８月ぐらいまでかなと言ってたんですが、７月から育休なので６月いっぱいで大丈夫そうですって、見通しも立ってきたのでというふうに言われたんで。その際にうちの主人は、出世街道からは、もうそこはいいやと思って育児休暇を取ってくれることになったんです、というふうにおっしゃってたので、随分違うなというふうに思っています。なので、早田さんが長期はちょっと難しいんじゃないなというふうにおっしゃってたのは、本当に現状ではないかなと思います。そういうふうに出世街道から外れてしまうというふうに思ってしまうような企業がまだまだ多いんじゃないかということと、あと南丹で言うと、南丹で育児休暇を取れるところは公務員の方しかないんです。中小企業や自営業の方が多過ぎて、そういった制度をちゃんと使えるという環境がない子育て中の方のほうが実は多い。京都府も都市部と農村部、山のほうとそれぞれの地域に合った施策とかを今後、子育て環境日本一って本当に応援しますので、一緒につくることができたらなと思います。

○西脇知事　実はここからは、耳の痛い話も含めて、いろんな現状に対する不安とかそれから問題点とか解決策を話していければ。

いきなり、育休というのは公務員だけという最も耳の痛い話を聞かされましたけれども。企業の方が、かなりベースとしては、特に男性のほうが育児に参加する。これちょっとまあ２つあって、本人の意識の問題もあるんです。（出世から）外れるんじゃないかという不安については、会社が明確に外すということは絶対言わないんでね、休みを取るなというのはあるかもしれませんね。だって、もう仕事が回らないからですね。だから、その意識の問題と。本当はその意識を持った人がその後もきちっと普通に取ってる人取ってない人の区別なく、その会社の中で地位を確立されている例が出てくれば、まずその不安は一遍になくなると思うんですけど、ちょっとその例が出るまでには、まだ時間かかりそうですよね。だって早田さんの年齢でもそうおっしゃってるわけですから。ましてや我々の世代に近いところでは、公務員と言ってもそれは取りにくいですよ。誰でもというわけじゃないので。だから勇気が要るということですよね。ありがとうございました。

じゃあ、時間はちょっと大分たってきたんですけど、北崎さんに今の現状の、またこれまでの経験の中で、子育ての支援とか子育て環境について、こんな問題点があるとか、こういうところが改善されたらいいかなとか、その辺で気づいたことがあればお願いしたいと思います。

○北崎瑞帆　そうですね。私はすごく周りに助けてくれる人がいて、南丹市に４年もいますが、私の実家の近くなんかは、近所の人が私の小さいときを知っていて、私の子供もまた私のようにかわいがってくれて、地域みんなで私は守られて育ってきたなってすごく思います。ただ、南丹市は広いこともありまして、地域によりましては、新しく引っ越ししてこられた方が多い地域や近所にお友達がおられなくてすごく困ってる方もおられますし、何か頼れるところが、家族のように自然に頼れるところがあるというのはすごく心強いんじゃないかなと自分の中でも感じています。そうですね、やっぱりそういう支援を、支援制度。私も上の子が小さい間は、市の支援センターによく足を運んでいました。２人で過ごす時間の使い方がわからなかったり、何か家だと家事があったりとかゆっくり関われる時間がなかったり。あと、同じ子育て世代の人と同じように悩みを共感したいなとか、わかるということを感じられる場所に行きたいというのもすごくありました。私も早くに子供を産んだので、いとことかも余り近い子がいなかったので、子供同士がかかわって、自分も気持ちがリラックスできる場所、リフレッシュして子供も遊んで成長できる場所がすごく大切だなと思うようになりました。そんな感じで。

南丹市の支援もちょっと気になるのは、町によって幼稚園がなかったりする場所があって、幼稚園と保育園がある町と、車で行かないと幼稚園がない場所があって、そういうところに保育所しかないんです。小さい子がおられたり、まだ働く気持ちじゃないお母さんもおられますが、そういう方でも保育園に入る状況になっていて。就業証明が要ることなんですが、すごく曖昧な感じで「行かせてもらっていいんかな」という、地域によって差があるというのは、すごく感じるようになりました。働いているお母さんが南丹市でも多く、私の友達も大概１年、子供が１歳になると保育園に預けて、刺激を受けて働くという気持ちになるようになってきたんですが、やっぱり近くに助けてもらえる方がいなかったりするというときに、生活に支障がある。仕事が休めないという場合も、いざというときの本当に預ける先がなくて、病気のときに誰かに見てもらえる環境というのは、私だったら祖母が近くにいるので病気になろうが、私が熱が出ようが、誰かが助けてくれますが、やっぱりそれがない環境の方もおられます。そういうのは南丹市でも、うちの地域にあればすごく心強いんじゃないかなという感じは、子育てをして感じています。

○西脇知事　ありがとうございました。

じゃあ秋田さんのほうは、支援、子育ての広場の運営とかですね、そういうことでの何か課題とかあればと思いますし、あと日ごろの保護者の方と接される中で、現状について、不満や問題があれば教えてください。

○秋田裕子　今、子育ての広場のお母さん方と話しながら思うことは、伊藤さんもおっしゃってましたけど、本当に情報が全部スマホの中なんですね。情報があふれ返っていて、あれも試したのに、これも試したのに全然だめでどうしましょうという話がやはり多いので、

全部、スマホしか見てないんですよね。お子さんを見てない、全然。子供のことをしっかりと見ていれば、本当はどうしてほしいのか、今おっぱいが欲しくて泣いてるのか、いやいやそうじゃなくて泣いてるのかという、そういう機微を感じ取れる五感が、本当に親自身にも少なくなっているなと思います。

おむつ替えを黙ってしてるんです。私たちのときは「気持ちいいね」とか「あんよ、あんよ」とかと言いながら、別にそこでコミュニケーションを取ろうとは思っていないけれども、自然とそんなふうに遊びながらやっていたことが、今は全く少なくなっていて、コミュニケーション能力がどんどんなくなっていってるというのを本当にひしひしと感じています。そこはもう見本を見せながら、「させてね」と言いながら、見てもらうというようなスタイルを取っているんですが、やはり学ぶ機会も必要かなと思います。

○西脇知事　具体的にはどこで学ぶのが一番いいんですかね。

○秋田裕子　学ぶ機会は、やっぱり子育てのお母さん方が一番最初に行くのって、子育ての広場だと思うんです。そこで、身軽に身近に学ぶ機会がもっともっとふえていけばいいなと思います。行政の専門職の方がやるメリットと、私たちみたいに民間がやるメリットもそれぞれあると思うんです。だからそれぞれの特性、特技を生かして、一緒にタッグを組みながらできるのが一番いいと思っているので、南丹市の場合は、本当に子育てに関することは行政のほうも理解を示してくださるので、一緒にタッグを組むことが本当に多いので、いろんなことを投げかけたら、それを実現するために本当に協力してくださるんです。南丹市以外のところは、なかなか壁が高いねという話とかもＮＰＯとかからは聞くので、そういったところを一緒に立場を超えて、京都の子供たちをどういうふうに世界に飛び立たせるために支援していくのかという視点で話ができたら、コラボが始めていけたらいいんじゃないかなと思います。

私１つお伝えしたいことがあって、今南丹市でも保育園、一応今は、形上は待機児童は出ていませんが、希望の保育園には入れないんです。自分の近いところには入れないんです。今、妊婦訪問もしているんですが、その中で私とても衝撃的だったのが、育児休暇のしっかりある企業にお勤めの方で、１年間育児休暇をこれから取るんですというふうにおっしゃってたんですが、訪問したのが去年10月です。保育園の募集が11月ぐらいから、10月の末ぐらいから始まるんですが、確かに（育児休暇は）1年間取れるけれども、キャリアも捨てたくない。でも、もしかしたらすごくかわいくってこのままやめてでも子育てをしたいなと思うかもしれない。でも産んでもいないのに保育園の予約をしなくちゃいけない。そこがとても悩んでいらっしゃって、とりあえず形だけは保育園の予約はするけれども、実際やめると言えるのかな、申し込んだのに。本当に空きがないのに今から申し込んでおいて、確保していただいているのに行かないってどうなんだろうという、そこのせめぎ合いがもしかしたら生まれるかもしれません、とおっしゃってたのは、とても象徴的だ

なと思いまして。

実際、南丹でも経済的に本当に必要だから働きたい、キャリアのために働くという方も多いんですが、でも周りのお母さん方が働き始めるから、私も何か預けなくちゃいけないのかしらということも実際にあるんです。本当にキャリアと子育ての両立って本当に難しい段階に来てるかなと。来年から無償化とかというふうな話になると、そこら辺に拍車がかかってしまって何かおかしいことにならないかなというのは、ちょっと現場では不安に思っております。

○西脇知事　ありがとうございます。伊藤さん、今まではお母さんの悩みなんですけど、今度はちょっと保育士の立場として、いろんな現状ですとかこういうふうに変わればいいなというようなことがあればお願いします。

○伊藤治子　今、秋田さんのお話も聞かせていただいてた中で、北崎さんの話も特別なんですけど、やっぱり子育てをするのにどうしたらいいのかがわからないというお母さん方、それの情報をどこで仕入れたらいいのか、講座を開いてもらったらいいというふうな話があったんですけど。精華町では、虐待件数も10年前から倍以上にふえてるんですね。その未然防止をする対策事業の一環としてＢＰプログラム、そしてＮＰプログラムというふうな親支援のプログラムをさせてもらってるんですね。ＢＰプログラムは何やねんというところで、第１子で２カ月から５カ月の子供をお持ちのお母さんを20人近く集めて、一緒に１カ月、週に１回なんですけどプログラムをするんです。資格を持ってるファシリテーターが、そのお母さんたちに赤ちゃんの抱き方、赤ちゃんのあやし方とか、赤ちゃんってこんなふうにしたら心地よくなるんです、というプログラムをさせていただいてて、それを１年間に２回させていただいているんです。もう一つのＮＰプログラムというのは、１歳から５歳までのお子さんをお持ちで、これは第１子とか第２子関係ないんですね。子供が、例えば今多いのは、２人子育てをする中で、物すごい子供が気になる行動をする、どうしたらいいかがわからへん。いらいらするし、私たたいてしまうとか、もう子供の顔も見たくないという、それで鬱になってしまったりというお母さんたちがいらっしゃる。それで、健康推進課の保健師さんが、訪問に行って、ちょっとお母さんしんどいよね、という方たちとアプローチしたりとかして、そういうお母さんたちに来てもらいます。２カ月。８回、親支援プログラムというので、お母さんたちに子供の育て方、子供ってこんなんやな、お母ちゃんのイライラってどこから来るのやろな、と言いながら、お母さんたちがつくっていくプログラムなんです。その中で、ここは安心安全の場やから、ここで話をしたことは外では言わないよ、というようなルール決めをみんなでするんですよ。そしたら、そのルール決めをする前とする後では、全然お母さんの表情が違うんですよ。「え、そうなん。ここで何でも話していいんですか」って。テーマもお母さんたちで今困ってることを先に挙げてもらうんですね。その中で育児協力者、夫のことであったり、お母さん、姑さんの

ことであったりとかいろんなこと。ママ友の悩みとか、そういうこともみんな含めて子供の行動で困ってることとか、自分がとにかく頭の中で日々思ってることを書いてもうて、それを一つにまとめて８回のプログラムの議題にして、みんなで深く話をすると。その間は子供を託児させていただくんですよ。だから離れるんですね。そしたら何よりも言いはるのは、最初託児が一番心配やと、子供が泣くし心配やなと。でもバイバイして、ここの空間に入ったら、ちょっとおやつタイムがあるんですね、ティータイム。こんなゆっくりと子供のことを気にせんとお茶飲めるのって何カ月ぶりなんやろって。そしたら、もうこの日が楽しみで。とにかくそのほっこり、子供と離れられるのがほっこりするということになります。

　そういったことがあって、そのプログラムが大事かなと思っています。でも、それには託児にも保育士のお金のほうもかかってきたりということで、予算がなかなかないという中で、それを減らしていくのか回数をふやしていくのかということで。やっぱり虐待関係の予算のほうをまたちょっと、増やしていただけたらなと。本当にこの要望が多いので、ＮＰプログラムの要望、託児というところで、またぜひ考えていただけたらなと思います。よろしくお願いいたします。

○西脇知事　じゃあまあ近藤さんも、保育士の立場として何かそういう。予算要望も含めて、それ以外でもいいんですけど、こんなふうな職場の何かありますか。お母さんというよりも働いているお立場として。

○近藤真由美　そうですね、今のここのすくすくの保育士としては、ここは登録してもらうのに、ＱＲコードを発行して入館していただくんですけれども、そういう事務の面でもいろんなお仕事が多いんですけれども、ここは事務の方がいてくださるので、事務関係のことはすごくしていただけるのですごく心強く思っていて。保育士としても、すくすくのプログラムをこなしていくだけの人材はもらえておりますので、充実してます。

○西脇知事　市長がいはるからということじゃないですか、いやいや。事務関係のことって重要なんですかね、人手という意味では。

○近藤真由美　そうですね、はい、そう思います。

○西脇知事　わかりました。ありがとうございます。では早田さん、先ほども聞きましたけどもし何かあれば。いわゆる男のほうの立場として、父親としての。

○早田良平　ちょっと父親の立場とは違うかもしれないですけれども、私、以前、和歌山に仕事で住んでいて、去年八幡に移ってきたんですけれども、それを決めた理由としては、妻の職場が八幡にあるので、京田辺市と八幡市と枚方市でどこがいいかなと比べて、一番保育園に入りやすいかなと思って八幡市に決めたんですけど。去年第２子がまだおなかにいるって知らない段階で妻が復帰を、１年たって復帰をしようとしたときに、保育園に空き状況とかも聞いてたんですけれども、ちょっと入れなくて。妻の職場には１月前に復帰

する旨、確定かどうかを言わないといけないんですけども、保育園が決まるのが１月、２週間ぐらい前ぐらいだったかな、入れるかどうかわからなくて。結果入れなくて、ちょっと職場にも迷惑をかけたということで、妻も少し気をもんでて。そうした職場との兼ね合いと、そういうのがもう少しはっきりわかるといいなとか。あとは先ほど話にも出たんですけど、病気のときとかに、このまま妻がまた仕事に復帰したときとか、子供が病気になったりとか、突発で何かいろんな事情が発生したときに子供を一時預かりしていただけるようなところというのがもうちょっと充実すると、今３人目も欲しいなと思ってるんですけども、そういったところに決断をしていけるのかなというふうに考えてます。

○西脇知事　本当に活発な意見をありがとうございます。大体時間なので、ほんまは私がまとめるんですが。まとめるよりも余りにたくさんのいい意見をいただきましたので、それぞれを受けとめたいと思うんですけど。

　やっぱり聞いてて思うのは、直感的に、お母さんを含めた社会全般の環境を育てやすいようにするという。私は京都で生まれたんですけど、東洞院というところに住んでいたんです。車がほとんどなくて、いつも床几のところで近所のお年寄りもおられたし。私、今は絵は下手なんですけど、当時うまかったかどうかわかりませんけど、チョークで道いっぱいに船とか飛行機をかいててね。親が消すん大変やったんですけどね、水まいてほうきで消すんですけど。すごい褒められてたなという感じもあってですね。ほんまはうまなかったんかもしれないですけど、何かみんなで。今まで聞いてて、何かあったときに助けてくれる人とか相談に乗る人とかって、もちろん施設、こういうところが非常に重要だと思いますけど、もう少し御近所とかね。南丹の端っこのほうへ行ったら御近所が車でどうしても15分だったら困るけど、もうちょっと町のほうへ行ったら何となくそういう見守りとかが、専門でもプロでもない近所のおっちゃんとかおばさんがやるようなことをできたら、もっと効率よくなるのかなという気もしましたけど。部長、何かあったら一言どうですか。

○松村部長　ありがとうございました。今あるサービスをどうやってうまく活用できるように充実するのかという視点もいただいたかなと思いますし、逆にもうちょっときめ細かに、子育てしている方々へのネットというか、支援をやっぱりやっていかなきゃいけないのかなというふうに思いました。多分、新たなものをつくるというのではなくて、今あるやつをどうやってつないでいくのかというのが。新たなものもせなあかんのですけれども、今やってることをより充実するというのも必要やなというのを感じさせていただきました。ありがとうございました。

○西脇知事　じゃあ本当に今日はどうもありがとうございました。それぞれ意見を重く受けとめて、引き続き頑張ってまいりたいし、別にこの場だけじゃないし、何かあればそれぞれのところで、責任者の方でもおっしゃっていただければと思ってございますので。本当に今日はお忙しいところ御参加いただきまして、どうもありがとうございました。